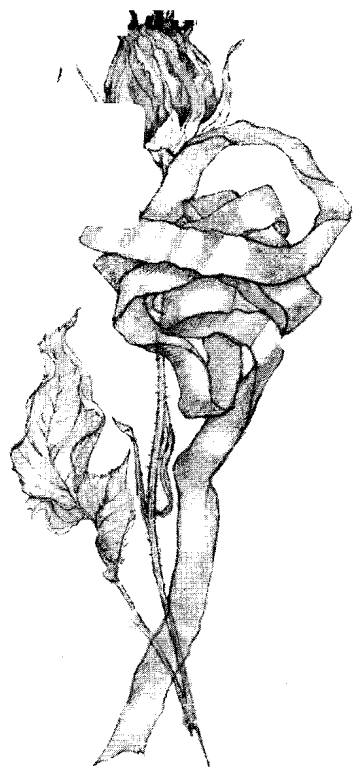




婚 約・倉橋由美子・新潮社



婚 約

定価 730 円

著 者 くら はし ゆ み こ
倉 橋 由 美 子

1961 年 2 月 28 日 発行
1974 年 9 月 30 日 11刷

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式 新 潮 社
会 社

〒162東京都新宿区矢来町71 振替東京808
電話・業務部(03)266-5111。編集部(03)266-5411
(印刷 金田印刷。製本 神田和雄)

目次

驚になった少年……………5

婚約……………31

どこにもない場所……………117

装
幀

村
上
芳
正

婚

約

驚になった少年

五月の輝かしい休日の午後、Lは空高く浮かぶガラス張りのグリルで、ある青年と見合いし、その場で婚約した。

空はよく晴れていた。厚いガラスをとおしてみると、それは現実味を失いどこにもない海に似ている。そしてこの海の底には、白いネオンの蔓にからまれた都会がざざざと聳え立っていた。自動車や人間は水底を遊泳する魚群だ……Lはすべてに満足していた。彼女は舌の上に積みかさねられていく料理の味を注意ぶかく保存し混ぜあわせながら、ペーコン巻きのローストビーフを片づけると、青年やその両親の方に微笑を送った。するとかれらも濃く化粧されたすばやい微笑を返してよこす。万事がこんなふうに進行していくのはLの期待したとおりだ。

Lはある大学の西洋史学科に在学中だった。来年の春、Lの卒業と同時に盛大な結婚式をあげるという予定については、双方とも異存はなかった。当日には礼服に身を固めた人たちが大勢参

列してあたしを見守り、その豪奢にふりそぐ視線のなかであたしは正式にこの青年の所有物となるだろう。そしてあたしの生活、軟禁された子供の遊びに似た日常生活がはじまるだろう……
 Lは葡萄酒で舌を湿らせながら、自分はけっきょくそれに慣れるだろう、と考えた。

婚約者のSは昨年あるビール会社に入社した青年だった。顔も体格も堂々と充実していた。かれの父も申し分ない恰幅だった。この父子は豊満な赤褐色の肉づきを共有しており、人はかれらを兄弟とまちがえたかもしれない。Lは初対面のときから、ひそかにかれらを《赤豚》と呼ぶことにきめていたが、この簡潔な命名はかならずしも彼女の嫌悪をしめすものではなかった。それはむしろ無害な愛称であったにすぎない。要するにLがかれらにしめた関心は、この命名を彼女におもいつかせた程度のものであったといえる。もしもSを愛しているかとたずねられたら、Lは呆然としてその質問の意味をききかえただろう。あれがあたしの《愛する男》かしら？ この考えはLを笑わせた。Sのなかに《婚約者》、そして《近い将来の夫》を探しもとめることさえもLには困難だった。あたしの愛する男という正札をぶらさげるにふさわしいところは、Sのよく脂ののった皮膚のどこにもみつかりそうにない。Lは最初から結婚の相手がだれでどんな男であるかについては、ほとんど考えてもみなかったのだ。そんなことは大した問題じゃないわ、と彼女は母にくりかえて語り、自分が関心をもっているのは、とにかくある男と婚約し結婚することだ、と説明した。どこでなによりも、挙式はむろんのこと、それにいたるあらゆる行事は形式正しく進められるべきだ。こんな方面について娘の積極的な意見をきかされると、母や祖母は感激し、保護者としての配慮をつくすことに子供じみた愉しみをみいだすのだった。

食事が終わった。LとSの結婚についてはもう語りあうこともなかった。父親同士と仲人とは——かれらはいずれも同じ財閥系の会社の重役だった——見合いの出演者という役柄を脱ぎ捨て、にわかに抽象的な紋切型を使って経済界の現況にかんする意見をとりかわしたりした。それは腹腔によく反響する笑いを伴い、十分豪放かつ鷹揚な印象を与えるものだった。母親同士は来日している外人芸術家たちの称賛のことばを放ちあっていた。彼女たちの口からめらめらと洩れでる虚栄心は、まるで獲物をからめとろうとするカメレオンの舌みたいだとLはおもう。Lは十本の指を複雑に組み、両耳を立てて一同の会話に気を配っているふりをしていた。じつは微笑の奥であくびをすこしずつ膨らませていたのだった。それから彼女はSを眺めた。Sが全然動かないので、非常に長いあいだかれの表面を眼で撫でることができた。あの人、大きな蟹の甲羅みたいだわ、とLはおもった。

型どおり、LとSは二人だけの時間をもつことになった。K座の切符がありますが、とSがいった。Lはこの計画に反対する理由もなかった。Sと肩を並べて祭祀的な劇を眺め、様式化された時間と空間の交織にたいくつした。婚約者は顔をゆるめて舞台ばかりみていた。観劇のあとのことについては便利な台本もなかった。二人は平凡な恋人たちのように暗い喫茶店にはいった。まったく場ちがいなかんじだった。L自身はバアの方を好んだが、自分からいいだすのはさしひかえたのだ。Sは会社のことを二、三しゃべり、Lは卒論のことをしゃべった。だがLはじきに話すことも面倒になった。Sを軽蔑したわけではなく、ただ、この青年をまえにすると、どんな話題を口にしても砂を嚙んでいるような気がしてくるのだった。まるでこの人と二十年も

いっしょに暮らしてきたみたいだわ、とLはおもった。別れぎわにSはLのさしだした手を握ったが、それは特別重量のある手で、Lにとっては他人の肉塊をささえてやるかんじだった。

まもなく結納がとりかわされた。LとSは正式の婚約者としてときどき会い、外交販売員がそのノルマを果たしていくような着実さで、約束した逢い引きのプランをつぎつぎと実現していった。Sはかれ自身の小遣いから指環を贈りたいといった。

誕生石の指環がいいでしょう。何月です？

十月ですわ。オパールね。

十月でよかったな。四月だったら大へんでしたよ、とSは中年男のような笑いをうかべていい、さっそく銀座の宝石商へ品物をみにでかけた。

婚約指環がSの手ではめられた翌日、Lは一種の悪趣味から、その人目をひく装飾品を指につけたまま、デモに参加した。Lにとっては学生のデモは祭礼のだんじりを曳いて練り歩く行事に似ていた。あたしが小さかったころ、あたしとおなじ年の子があのだんじりの下敷きになって芋虫みたいに轢きつぶされたことを憶えてるわ……それは勇壮で華やかな行列だった。デモの方は、狂熱的だが多少貧寒としているようにおもう。というのもこの祭式に参加するためには気恥ずかしいような悲壮感と正義感の昂揚、そしてなによりも血走った眼が必要だったから。けれどもL自身は、ひそかに、だんじりを曳く子供のあの愉しみを味わうために参加していた。それに彼女は文学部自治会の常任委員でもあった。この仕事は、Lにとって多すぎる余暇を消費するの

に役立っていた。

デモは新橋で解散した。政経学部の自治会で常任委員をやっているQがLの方に近づいてくると、お茶でも飲まないかと誘った。近くに最新の輸入原盤をいれてモダンジャズをやっている店があった。Lはデモのあといつもそこで休むことにしていた。Lがその店へいこうというと、Qは、ジャズは頹廢的であり好ましくないのだといった。Qのばあい、それはコミュニストたちの公式的な偏見というよりも、地方都市出身の貧乏学生特有の、時間と金の贅沢な消費にたいするしりごみにすぎず、要するにそういうものに無縁なのだ、とLはおもった。

だけどモダンジャズにも《労働歌》なんていうのもあるし、デモのとき歌っている歌よりよっぽど土臭いかんじよ、とLはいい、細いスラックスで締めつけられた脚を組んで椅子に身を沈めた。Qはメニューをみて高いのに驚いていた。金銭の勘定に頭を使うのは卑小でうんざりする労力だというのがLの身についた観念になっていた。第一Lは金に不自由したことがなかったし、金を使って欲望をものに換えるという手続きそのものも面倒臭い人たちだった。

Qは落ち着かないようすで身乗りだしてきた。頼みたいことがあるんだ、とかれはいった。しばらくのあいだ、ぼくのバイトを交替してやってほしいんだけど。

バイトって、なに？ とLはうわの空でいった。ウェス・モンゴメリイのオクターヴ奏法のギターに気を奪われていたのだ。

家庭教師さ。高校二年の男の子で、できのわるいやつなんだ。このところデモつづきでついき

まった日にいけなかったりして、むこうさまの機嫌がよくないんだ。ぼく、病氣だということでも、とLはいった。あなた、バイト休んでペイがはいらないと困るでしょ？ どうするつもり？

Qはみじめさのなかに押しこめられた顔をしながら、なんとかなるだろうといい、自分の気をひきたてるように笑った。Lは不愉快になり、ペイはいらないといってやった。Qは狼狽してそんなことはできないといった。しかしLがそんないうなら半分だけ貸してもらおうということにしてはどうだろう、と提案した。

いいのよ、とLはたちきるようにいった。あたし、お小遣いかせいだってしようがないんですもの。

そのとき、QはテーブルのうえにおかれていたLの手の指環に気づいた。

どうしたんだい、その指環？

あたし、このあいだ見合ひしたの。

それで？

大しておもしろくもなかったわ。それで、婚約しちゃったの。

LはQがひそかにLの恋人気取りでいたらしいことを知っていた。Lにとってはとんだ迷惑だった。こんな家畜みたいな男にかぎって人一倍恥知らずな空想を分泌するものだ、と彼女はおもい、容赦のない眼つきで相手を上から下へと撫でおろした。Qは『うちのめされる』ということ

ばそのままの状態におちこみ垢じみた喉を震わせていた。Lにはこの雑犬のような青年が学生運動にまぎれこんでいることがふしぎだった。それは不具者の参加が運動会の健康さを台無しにするようなものだ。あたしたちは余計者や負け犬たちがお祭りにまぎれて陰險な破壊を企むのを望みはしないだろう……Qのような学生は、アルバイトをして、いまよりも栄養を摂るために、学生運動なんかやめる方が合理的ではないか。Lはこの意見をよく光る歯列のところでせきとめた。その考えはまちがっている、安保改定を阻止するためには現在なにを犠牲にしても総力を結集しなければならぬ——そんなふうにQは演説するだろう。Lは黙っていた。するとQは次第に荒廃した氣力をかきたてた。そしてLを、ブルジョアの息子と婚約したブルジョア娘として、黄い眼できめつけるのだった。そして二、三のみえすいた皮肉をいい、立ちあがった。

学生生活とは数年におよぶ長い休暇であり、それは生活の真似ごと、つまり遊びによって消費するほかにないものだというのがLの考えだった。ふいに引き受けることになったアルバイトも、彼女にとっては劣等生の少年とその誇り高い母親を相手とするゲームにすぎなかった。そしてそれは、Lにははじめての経験だったにもかかわらず、二、三度教えにいくと、すぐ慣れてしまった。ゲームに加わっているのはLと同じ層に属する人々であり、Lはこれらのルールには完全に通曉していたからだ。

ある日、Lはバイト先の奥さんや少年たちと銀座のレストランで食事をした。Qが教えにいつているあいだにはこんなことはなかったのだが、と奥さんは多肉質の白い花びらに似た顔をほこ

ろほせながらいった。Qは食事付きだということを条件のひとつに挙げていたが、かれの《食事付き》とはたぶんあてがわれた配膳盆をまえにして食べる囚人の、あるいは飼犬の食事だったろう、とLはおもった。Lは神妙にナイフとフォークを操っていた。奥さんは少年たちの行儀のわるさをたしなめながらLの模範的なテーブルマナーをほめた。

ほんとに、先生は恵まれたお家にお育ちのようですよ、と奥さんは軽い湯気のような声をあげた。Lはつつましい微笑で顔をおおっていた。彼女はわざと地方出身で大学助教授の娘だということにしてあつたが、じつは彼女の方がより、上の家庭に属していたことはL自身にも明白だった。Lは奥さんのお世辞を寛大にうけいれていた。急に奥さんは驚愕の顔をつくっていった。

ときにきのは大へんでしたわね。先生もああいうところへはいらっしゃることがおありで……？

いいえ、とLはわからないまま答えた。話のようすでは、きのうのデモで女子学生が死んだというこしらしかつた。奥さんはなんの批評も加えずにただ幾種類もの間投詞を連発していた。いへべきことはあつたが、Lも調子をあわせて感に堪えぬというそぶりだけをしめしておいた。L自身も、こういうところでは死者にたいして、儀礼的に言及する以上のことはさしひかえられるべきだというルールを心得ていたからだ。

Qさんなんか、よくデモにいったりなさるでしょうね。

そうかもしれないわ、とLは曖昧にいった。Qさんとは同郷というだけでよくは存じませんけれど。

こういつてはなんですけど、と奥さんは身を乗りだし、厚い掌を菩薩像のそのように宙に保ちながらいった。なんだかあの方には安心してKをおまかせしにくいようなかんじがごさいますのよ。Kもそう申しておりますんですけど、できたらL先生にいつまでもご厄介になりたいなんて……

Kは形のよい鉸つばに似た耳を血の色で染めながらうなずいた。Lは困惑の表情をつくった。そしてQとの約束では一時Qの身替わりをつとめるだけだから、と説明した。

そのお話ならあたくしが直接Qさんに申しあげてもよろしゅうございますわ。なにしろこの子が……奥さんは身を震わせ口に手をあてて笑いだした。KがLでないとどうしてもいやだといいはっているというのだった。その理由はLがきれいでやさしいお姉さまであるからだ、と母親は説明した。

いやですわ、この子ったら。でもあなたもやっと年ごろになったんですものね。

奥さんはそういつてKをからかい、同時にそれによってLを一人の堅実な娘として上手に棚の上に押しあげてしまった。そのとき少年は長い睫毛を引きあげてLの方をうかがった。Kは美しい少年だったが、自分に恋しているという事態を確認するとLはとつぜんこの少年に神話の登場人物に似た輝きをみいだした。かわいがってやってもいいわ、とLはおもい、美味の残っている自分の唇をすばやく舌でなめた。あたしはアフロディテになり、このアドニスが非業の死を招きよせるまで愛するだろう。